
バカとテストともう一人のトモダチ ～Anothere Friend～

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストともう一人のトモダチ Another Friend

【Nコード】

N9836X

【作者名】

クロ

【あらすじ】

ココは文月学園。

主人公である高峰真白《たかみねましろ》が明久たちとのドタバタな高校生活を送る、そんな話。

真白「ところで作者。キミは受験生なんだろう？こんなことやって

て大丈夫なの？」作者「・・・そんなことは気にせずにいきましょう！」「真白「気にしようよ！！！」」

※作者には文才がほとんどありません！「駄文？関係ない！読む！」という人だけGO！

第一話（前書き）

こんにちは！

今作が初めてとなるクロです！

よろしく願います！

第一話

カリカリカリカリカリカリ……。

この教室ではずっとこのような音が響いている。

それもそのはず。今は振り分け試験の真っ最中なのだから。

（あー。めんどくさいなあ……。）

窓から外を見ながらそう心の中でつぶやいたのは、たかみねましろ高峰真白。

彼もまた（まあ、当たり前だが）振り分け試験を受けている最中だ。

彼はちらり、と横に座っている吉井明久バカを見た。

（さっきからウンウンうるさいなあ……。何言ってるんだろ？）

その明久バカは、『この程度なら……。十問に一問は解ける！二十点は硬いな……。』
とかつぶやいていた……。

（うん。明久、キミ、正真正銘のバカだろ。）

思わずそう思ってしまう真白だった。

と、そのとき。

ガタッ！と何かが落ちるような、倒れるような音が聞こえた。
思わず音のした方を見る真白。

その音は彼が知っている人物の席から聞こえてきた。

(・・・ッ！姫路！?)

そう。その音とは彼女——姫路ひめじみずき瑞希が倒れる音だったのだ。

『姫路さんッ!?!』

明久が叫び、騒ぎ始める同級生たち。

そこへ監督の教師がやってきて姫路に向かってこう言った。

——『試験途中での退席は「無得点」扱いとなるが、それでいいかね?』

「ちょ、ちょっと先せ「ふざけるな!!!」真白!?!」

明久が何か言ってるが、気にせず続ける。

「体調不良で退席が無得点? 姫路が体が弱いのは先生も知ってるでしょ!?!」

そう、彼女は生まれつき体が弱い。

そのことは教師であるこの先生は知っているはずなのだ。

それなのに。

どうして優秀な彼女が無得点にされなければならない?

「黙れ! 教師に逆らうとは何事だ! お前も無得点にするぞ!」

職権乱用気味のセリフが聞こえたが、もう覚悟は決まっていた。

「それで結構。行くよ、明久。」

「う、うん。」

そして真白と明久は、姫路を保健室まで連れて行った。
テストの点など気にもせず。

ココは文月学園。

テストの点でクラスが決まる、実力主義の高校。
そして「試験召喚システム」という科学と偶然、そしてオカルトから生まれたものがある高校。

彼らが文月学園に入学して、2回目の春が訪れようとしていた。

第一話（後書き）

誤字、脱字などありましたら、お願いします！

なお、感想などいただけるとめちゃくちゃ喜びます。

第二話（前書き）

短編のほうを見てくれた方、本当にごめんなさい！！！！！！

せめてものお詫びに面白いと思ってもらえるような作品を書いていこうと思っています。

では、お楽しみください。

すみマセンでした・・・。

第二話

P i P i P i P i P i

「うゝん．．．。」

僕、高峰真白《たかみねましろ》はそんな電子音で目が覚めた。
時刻は5時25分。学校へ行くのにはまだまだ十分な時間がある。

では何故、僕が早く起きているのか。

答えは簡単、「僕の分の弁当を作るため」である。

僕は今、一人暮らしをしている。

家族はというと、両親は海外へ赴任しており、
兄弟は一応姉がいるが．．．。思い出すとトラウマが目覚めそうなのでやめておく。

そんなわけで僕は今『実質』一人暮らしをしているわけだ。

「さて、ちゃっちゃと作っちゃいますか．．．。」

実は僕、かなり料理ができたりする。

なぜかというと、母親と姉が「必殺料理人」といってもいいぐらいの腕だからである。

あの人たちの作る料理は本当にひどい。

何せ、野菜だけを使って料理したはずなのに、洗剤のようなにおい、そして言葉では表せないほどの破壊力を持った兵器に変身するのだから。

「うう……。思い出したら吐き気がしてきた……。」

ちなみに、その味はしっかりと僕の楽し^{トラウマ}かった思い出になってたりする。

そんなわけで、彩り豊かなお弁当を完成させた後、制服に着替えて家を出る。

この時点での時刻は7時40分。

文月学園へと続く道は桜が満開だった。

その桜並木の中を僕はゆっくり歩いていった。

第二話（後書き）

というわけで、第二話でした。

いかがだったでしょうか？

誤字・脱字の報告、感想などお待ちしております！！！！

今日中にもう一話更新すると思います。

第三話（前書き）

第三話です！

それではどうぞ！

第三話

歩いていくと、誰かが校門の前に立っていることに気がついた。生活指導も担当している西村教諭、通称「鉄人」だった。

一応、挨拶しておこう。

「鉄・・・西村さん、おはようございます。」

「ああ、高峰か。おはよう。ところでお前、今鉄人って言わなかったか？」

「ははっ、気のせいですって。」

「ん、そうか？」

さわやかな笑顔を顔に浮かべてごまかす。

ふう、危なかった。危うく普通に鉄人と呼んでしまうところだった。僕は普通、教師を「くさん」と呼ぶ。鉄人の場合は例外だが。

何故、西村先生が鉄人と呼ばれているかという点、先生の趣味がトライアスロンだからだ。

真冬であっても半袖を着ていることも要因のひとつかもしれないが。

「それにしても高峰。お前ももったいないことをしたな。」

そんなことを考えていると、鉄人がいきなり話しかけてきた。もったいない？何のことだ？

そう考えているのが分かったのか、鉄人は言った。

「振り分け試験のことだ。お前のやったことは確かに正しいが、お前の頭ならAクラス入りは確実だったろうに。」

ああ、あのことか。

「そのことなら別に残念とかは微塵も思ってもませんよ？普通、人が倒れたらアレぐらいはするでしょう？」

しかも倒れたのは知人なのだ。介抱しないほうがおかしいと思うんだけど・・・。

そういうと鉄人は少し間ばかんとしたような表情を浮かべ、そのあといきなり大声で笑い始めた。

「はっはっは！高峰、俺は長年生徒を見てきたが、お前みたいなやつは初めてだ！」

「・・・？なんのことです？」

本当に何を言っているだろうか。

「お人よしというかなんと言うか・・・。お前は本物の人格者だな。」

「よしてください。僕はそんなんじゃないですよ・・・。というか、先生のほうが人格者でしょ？」

「ははは、そうか？まあとにかく、お前は正しいことをやった。そ

れは胸を張っていいと思うぞ。」

鉄人がそう僕に言い、封筒を渡してきた。

「お前が今年一年間を過ごすクラスが書いてある。まあ、お前の場合の結果は分かっているが・・・。」

封筒を開ける。

中に入っていた紙にはこう書かれていた。

——高峰真白・・・・・・Fクラス

「一年間、しっかりやれよ。」

そういつて鉄人は他の人に封筒を配りに行った。
その後ろ姿はまさに『人格者』だった。

第三話（後書き）

というわけで第三話でした。

いかがだったでしょうか？

誤字・脱字の報告、感想などお待ちしております！

第四話（前書き）

第四話をお届けです！

それではどうぞ・・・。

第四話

「・・・なんでこんなに教室がでかいんだろう・・・。」

去年は足を踏み入れる機会が少なかった三階に言ってみると、普通の教室の五倍はありそうな教室が目飛び込んできた。これが『Aクラス』なんだろうか。

中では高橋さんが自己紹介をしていた。

『皆さん、進級おめでとうございます。私はこの二年Aクラスの担任、高橋洋子たかはしやうこです。よろしくお願いします。』

そういうと、後ろの超巨大なディスプレイに名前が表示された。
・・・一体いくらするんだ？

『まずは設備の確認をします。』

お、設備の確認が始まるみたいだ。一体どんな設備なんだ？

『ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート
その他の設備に不満がある人はいますか？』

うわぁ、思ってた以上に贅沢だな。

『参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関してもすべて学園側が支給いたします。他にも何か必要なものがあつたらなんでも申し出てください。』

ほんと、すごいな。

『ではまずはじめに、クラス代表を紹介します。霧島翔子さん、前に出てきてください。』

『・・・・・・・・はい。』

お？Aクラスの代表が出てきたみたいだ。他の人らも注目してるな。そりゃそうか。一番上のクラスの中のクラス代表ってことは学年一位ってことなんだから。

『・・・・・・・・霧島翔子です。よろしくお願いします。』

クラス全体を見ながら言う。・・・？女子しか見てないような気がするんだけど。

そういえば霧島は同性愛者ってうわさがあったな。

『Aクラスの皆さん。これから一年間、桐嶋さんを代表として協力し合い、これから始まる「戦争」でどこにも負けないように』

高橋さんが素晴らしい、霧島が軽く会釈をして席に戻る。

うん、もうそろそろ僕も行こうかな。

――――
Fクラス
バカの巣窟に。

第四話（後書き）

というわけで、第四話でした。

いかがだったでしょうか？

誤字・脱字の報告、感想などお待ちしております！

次回、Fクラスへ！

第五話（前書き）

どうも、クロです。

第五話の投稿。

Fクラスへといざ行かん！

第五話

二年F組と書かれたプレートがある教室があったので、入る。

「おはようございまーす。」

「おう、真白か。おはよう。」

軽く挨拶しながら入ると、挨拶が返ってきた。

挨拶してくれた人のほうを向くと、去年一年を同じクラスでバカさかもとゆうじをしていた友達、坂本雄二の姿があった。

そして彼は、なぜか教壇に立っていた。

「雄二、何で教壇に立ってるんだ？もしかしてキミがこのクラスの担任なの？」

「ありえないことを言うなよ。教師が遅れるらしいから立ってみただけだ。」

だよな、ありえないよな。雄二に教えられるものなんてないもんな。

「もしかすると、雄二がクラス代表なの？」

「ああ、そうだ。」

にやり、と笑って答える雄二。

そこで教室のドアが開き、こんなセリフが聞こえた。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ♪」

「早く座れ、このウジ虫野郎」↑真白&雄二

「台無しだっ！」

おお、見事にセリフがかぶったな。

「…………雄二に真白、何やってんの？」

さっきの声の主、明久が聞いてきたので答えてやる。

「何でも先生が遅れてるらしいんだよ。だから代わりに教壇に上がったんだってさ。」

「先生の代わりって、雄二が？何で？」

「雄二がクラス代表だから、ぐらいしか理由はないと思うんだけど……。」

「これでこのクラスの全員が俺の手駒だな。」

ふんぞり返って床に座っているクラスメイトたちを見下ろす雄二。
何故、床に座っているかというと、理由は簡単だ。

——椅子がないからである。

ついでに言うならば、机もない。あるのは座布団とちゃぶ台だけだ。

「それにしても……。さすがはFクラスだね。ひどいもんだよ。」

「さすがにこれは、な・・・。」

そんなことを話していると、不意に背後から

「えーと、ちょっと通してもらえますか？」

という覇気のない声が聞こえた。

後ろを振り返ってみると、寝癖のついた頭によれよれのシャツを貧相な身体に着た、いかにもさえない風体のおじさんがいた。

どう見ても、生徒には見えない。多分、このクラスの担任だろう。

「それと、せきについてもらえますか？HRホームルームをはじめますので。」

「はい、分かりました。」↑明久

「りょーかいです。」↑真白

「うーっす。」↑雄二

と、三者三様の返事を返し、席に着く。

先生は僕らが席に着いたのを確認してから口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組の担任の・・・」

黒板のほうを向いて、名前を書く・・・と思いきや

「福原慎です。よろしく願います。」

やめた。どうやらチヨークがないようだ。チヨークすら支給されていないのかよ……。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出てください。」

Aクラスとはすごい差だな。

「先生、俺の座布団、綿がほとんど入ってないです！。」

「あー、はい。我慢してください。」

え？それって不備じゃないの？

「先生、卓袱台の足が折れてます。」

「木工用ボンドが支給されますので、それを使って後で自分で直してください。」

変えてあげてよ！そこは変えてあげてよ！

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど。」

これはさすがに業者にお願いを……

「わかりました。」

よかった。そこまで常識はずれな高校――

「ビニール袋とセロハンテープの至急を申請しておきましょう。」

だったぜ、畜生！

というか、それで風雨をしのげといっているんだろうか・・・。

先生の真意が気になる・・・。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください。」

うん。もういいや。

その後もいくつか不備が言われていたが、先生はすべて「我慢してください。」か「自分で調達してください」の二択で答えていた・・・。

第五話（後書き）

第五話でした！

次回、混沌カオスな自己紹介が始まる！！！！
（笑）

第六話（前書き）

第六話、更新です！遅れてすみません・・・。

文化祭とかテストとかテストとかがあって更新できませんでした・・・。

それではどうぞ！

第六話

不備の確認（まあ、たいていのことはスルーされてたけど）が終わると福原先生は、

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします。」

と言ってきた。

自己紹介か。今年一年を同じクラスで過ごすんだ。その戦友なかまのことを知るのはいきなりじゃないだろう。

福原先生の指示に従い、廊下側の生徒の一人が立ち上がり、自己紹介を始めた。

きのしたひでよし
「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

ん？よく見たら秀吉じゃん。僕の去年のクラスメート、バカ友達の一人だ。

変な言葉遣いに小柄な体（僕もあんまり大きくないが）。肩にかかるぐらいの髪をゆったりと縛っている。間違いない。

・・・そんな格好してるから女に間違えられるんじゃないかな？

そう思った僕だったが、自己紹介の途中なので、言葉を飲み込む。

「・・・・・・・・・・と、いうわけじゃ。今年一年、よろしく頼むぞい。」

そういつて軽やかに微笑み、秀吉は自己紹介を終えた。

・・・今のは僕も少しドキツとした。

そんなことを考えているうちに、次の人が自己紹介を始めた。

「・・・つちやこうた・・・土屋康太。」

お、康太じゃん。彼も去年のクラスメートであり、バカ友達の一人だ。

・・・って言うか、自己紹介、短っ！

たった四文字で終わりって！もっと話すことあるでしょうが！

心の中でそう突っ込みを入れていると、自己紹介の声が聞こえた。

「―――です。海外育ちで、日本語は会話できるけど読み書きは苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は―――」

お、珍しい。女子の声だ。見渡す限り男だったから女子はいないのかと思ってた。

――吉井明久、ならびに高峰真白を殴ることです☆」

うおいっ！？誰だっ！？そんなピンポイントで危険な趣味を持つ奴は！？

声がしている方向を向いてみるとそこには、

「はろはろー♪」

「……………あう。島田さん。」

僕と明久の天敵、島田美波しまだみなみさんが笑顔で手を振っていた。

「吉井に高峰、今年もよろしくね。」

横を見ると明久が、『そんな……。僕がこいつらと同レベルなんて……。!』とつぶやいていた。

僕は、明久はそれ以上のバカだと思うのだが……。

「……………です。よろしく。」

明久の前の人が自己紹介を終えたようだ。
一応、明久に聞いてみる。

（ねえ、明久。自己紹介はどんな風にするつもり？）

（軽いジョークを織り交ぜてやるつもりだよ。まあ、見てて。）

そう言いつつ明久が立ち上がり、自己紹介を始めた。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

あ、バカ、このクラスでそんなことやったら――

『『『『『ダアアァーリィーン!!』『』『』『』』』』』

「？ 何のようだ？」

真白に手を引かれ、廊下に出て行く雄二。

そしてすぐ、断末魔の悲鳴が聞こえ、秀吉は静かに手を合わせて合掌。

3分後、廊下でボロ雑巾のようになって横たわる雄二（だった物体）がいた。

誰がやったんだろうネ？

第六話（後書き）

今回は少し長めでしたね。

・・・え？これぐらいが普通なの？

次回、ピンクの髪ひとのあの女がやってくる！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9836x/>

バカとテストともう一人のトモダチ ～Anothere Friend～

2011年11月4日03時08分発行